OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	レコンキスタの起源について 論文紹介 : A. ベスガ・マロキン著、「8世紀のアストゥリアス王国」
Author(s)	大内, 一
Citation	Estudios Hispánicos. 2019, 43, p. 81-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98042
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

レコンキスタの起源について

論文紹介：A. ベスガ・マロキン著、「8世紀のアストゥリアス王国」

大内　一

イベリア半島に関する歴史研究の重要なテーマのなかで、「レコンキスタ」ほど専門家の間で議論の対象になったものはない[1]。「レコンキスタ」という単語そのものは、19世紀の自由主義的スペイン・ナショナリズムの形成期に歴史用語として用いられるようになったが、その概念は早ければ8世紀半ばに、遅くとも9世紀下四半期には存在していた。その後、「レコンキスタ」の概念は、スペインの歴史の様々な時期に、時の政府指導者や政治家によって特定の政治目的を達成するためのイデオロギー的道具として利用されてきた。この例として、フランコ期における「スペイン・ナショナリズム」や「ナショナルカトリシスモ」と「レコンキスタ」の概念との関係性を思い浮かべれば十分であろう。もっとも、フランコ期の負の記憶を踏まえ、現在では、「レコンキスタ」の概念からイデオロギー要素を切り離し、「レコンキスタ」を単なる現象として理解しようとする傾向が広まっている。

「レコンキスタ」の起源についてもまた、重要な議論が行われた。近代歴史研究におけるこのテーマの議論は、1965年に公刊されたマルセロ・ビヒルとアビリオ・バルベロの共同研究を出発点としている[2]。彼らは、文献資料と考古学的証拠に基づいて、半島北部諸部族がローマ化およびキリスト教化をほとんど受け入れず、原始的な固有の社会構造に執着し続けたとする仮説を立て、ローマに対する抵抗姿勢を西ゴート人に対しても維持していた北部諸部族が、新たな侵略者であるアラブ人の支配に対しても同様に抵抗したことが「レコンキスタ」の起源と解釈されてきたと結論づけた。この見解に

1　レコンキスタに関する研究史を整理した研究成果として、Eloy Benito Ruano (Coord.), «¿Re-conquista? Un estado de la cuestión», *Tópicos y realidades de la Edad Media* (I), Madrid, Real Academia de la Historia, 2000, pp. 155-178 および Francisco García Fitz, *La Reconquista,* Granada, 2010, pp. 11-56 を参照されたい。

2　Abilio Barbero de Aguilera y Marcelo Vigil Pascual, *Sobre los orígenes sociales de la Reconquista,* Barcelona, 1974 で再公刊されている。

従うと、「レコンキスタ」の起源は、西ゴート王国の復興や半島カトリック世界の回復と言った政治的、宗教的理由に求められるのではなく、経済的、社会的発展を目指す北部諸部族による拡大運動のなかに求めるべきものとなる。

この仮説は大きな反響を呼び、数多くの歴史教科書にも「レコンキスタ」に関する新たな通説的理解として掲載されるまでに至ったが、近年になり、この見解に対して異を唱える研究者たちが現れた。その1人がアルマンド・ベスガ・マロキンである。彼はビヒルとバルベロの「アストゥリアスとカンタブリアは西ゴート人に征服されなかった」とする見解に対し、アストゥリアス王国のヒスパノゴート起源説を唱えて対抗した[3]。

本稿は、アルマンド・ベスガ・マロキン[4]が「8世紀のアストゥリアス王国－レコンキスタの起源－」[5]と題して歴史雑誌『historia 16』に掲載した論文の訳出を通して、同テーマに関する研究史を整理するための一助としたいと考えるものである。

*　　*　　*　　*　　*

8世紀のアストゥリアス王国－レコンキスタの起源－

アルマンド・ベスガ・マロキン

アストゥリアス王国（したがってレコンキスタの起源）の実相をめぐる解釈は、現在のスペイン中世史研究のなかの大きな問題の1つとなっている。現存する歴史資料の特徴や在り方がその主な理由である。第一に、史料の数

3　Armando Besga Marroquín, *La situación política de los pueblos del norte de España en la época visigoda,* Bilbao, Universidad de Deusto, 1983. *Orígenes hispano-godos del reino de Asturias,* Oviedo, Real Instituto de Estudios Asturianos, 2000.

4　デウスト大学教授。中世前期のバスク地方およびアストゥリアス、カンタブリア地域の歴史研究を専門とする。

5　Armando Besga Marroquín, «El reino de Asturias en el siglo VIII. Los orígenes de la Reconquista», *Historia 16,* 323, 2003, pp. 24-51.

が非常に少ないことが挙げられる。アルフォンソ3世の統治期（866-910年）に編纂されたアストゥリアス諸年代記[6]が主たる史料であり、それらは短い文章と簡潔な表現を共通の特徴としている[7]。8世紀のイベリア半島について研究するには、キリスト教徒の年代記による情報のほかに、少数の文書館資料やイスラム教徒の歴史書から得られる情報と考古学が今までに提供した数少ないデータしか頼るものがない。しかし、その一方で、これらの史料の信憑性については、今もなお活発に議論されているが、その結果、歴史が「自由に」作られる可能性が生じている。なぜなら、この問題に関する研究の現状では、個々の研究者にとって、自身の見解の根拠となる文書資料を自由に選択し解釈するための余地があるからである。アストゥリアス諸年代記、すなわち『アルベルダ年代記』と『アルフォンソ3世年代記』（ロダ版とオビエド版の2版がある）は多くの問題を提起しており、これらに関する研究がスペイン中世史のなかの1つの専門分野を形成していると言えるほどである。また、これらの年代記は、スペイン中世の古文書のなかで最も多く繰り返して編纂されたテクストであると言える。ここに私たちの関心を引く問題が2つある。1つは、これらの年代記がかなり時代を経て9世紀末に編纂されたということ（と、アストゥリアス王国の起源とその初期の歴史を知るための情報が他にないということ）である。もう1つは、私たちが研究の対象とするアストゥリアス王国の誕生と年代記編纂の時期（アストゥリアス王制の最盛期に当たる）の間に、アストゥリアス王国を西ゴート王国の後継者とする思想、すなわち新ゴート主義が勝利を収め、アストゥリアス諸年代記がその思想の主たる表明媒体となっていることである。このことは、諸年代記のテクストが、2つの君主制の連続性をアピールしたいという願望に制約されていることを意味している。また、後の時代に作成された写本として今に伝わる文書館資料（その評価は千差万別である）－繰り返し議論された

6　一般に、『アルベルダ年代記』、『預言的年代記』、『アルフォンソ3世年代記』の3者を指す場合が多い。もっとも、『預言的年代記』は『アルベルダ年代記』に加筆された1つの章であり、本来の年代記ではない。その大まかな内容は、旧約聖書のエゼキエルの預言をモチーフとして、西ゴート王国滅亡から170年後、ときの国王アルフォンソ3世がゴート人をアラブ人の支配から解放し、旧王国を復興してヒスパニアを統一支配するというものである。本稿では、『予言的年代記』を『アルベルダ年代記』の一部と見なし、『アルベルダ年代記』と『アルフォンソ3世年代記』をアストゥリアス諸年代記としている。

7　（原注1）本稿に記載した年代記の書きぶりを参照されたい。

国王シロの贈与文書[8]は例外－が提起する問題も少なくない。文書館資料には、真正文書だけでなく偽文書や改竄文書が存在するが、なかでも改竄文書は、同じテクストのなかで改竄部分と真正部分を見分けるのが困難であるため、より多くの問題を生んでいる。文書館史料のテクストの大部分については、既に（研究者の間でその重要性に関する）大まかな合意があるが、活用できる情報を特定する段になるとまだ意見の一致は得られていない。イスラム教徒による史料は、さらに後年に記されたものであり、様々な問題を抱えていて、多くの場合は考慮に値しない。考古学のデータについては、歴史家に用いられるためには、事前に解釈されていなければならない。確かに、近年ますますの発展を遂げている考古学から、現在活用できる情報の実質的な拡大を期待することだけは可能である。しかし、考古学には限界があることを忘れてはならない。なぜなら、私たちは、先史期の研究を行う際、考古学のみでできる事柄を知っているからである[9]。

アストゥリアス王国の先史期

歴史家の間で見られる対立は、史料による情報がほとんどない原初アストゥリアス王国の過去に関する解釈の違いによるものである。20世紀の最後の3分の1世紀の間、スペインの歴史学会のなかで、アストゥリアスとカンタブリアの歴史がローマ帝国の最後の数世紀とゲルマン諸王国の時代を通してイベリア半島の他の地域の歴史、（したがって西洋の歴史）から切り離されていったという考えが広がった。この考えは、アストゥリアス王国時代に考案され20世紀半ば近くまで歴史学会を支配していた新ゴート主義とは正反対であるので、《在地主義》と表現しうる学説である。この学説は、カンタブリア海沿岸地域の不十分なローマ化を出発点とし、これをローマに対する抵抗と解釈するものである。この抵抗は帝国末期において半島北部の諸部族の不服従を引き起こしたと思われる。この学説は、もとの解釈に依拠しつ

8　国王シロが775年8月23日付けで修道院建立のために行った贈与に関する文書。現存するアストゥリアス王国最古の国王文書とされる。

9　（原注2）史料の全体像を知るためと本稿を補足するために、Armando Besga Marroquín, *Consideraciones sobre la situación política de los pueblos del norte de España durante la época visigoda del reino de Toledo,* Universidad de Deusto, 1983, 158 pp. および *Orígenes hispanogodos del reino de Asturias,* Real Instituto de Estudios Asturianos, Oviedo, 2000, 635 pp. を参照されたい。

つ形を変えて様々な出版物のなかで表明された異説を包含しつつ定式化した。その後のスエビ人も西ゴート人もスペイン北部の諸部族を従属させることができなかった。北部の諸部族は血縁関係に依拠する理由で「氏族的」と形容される原始的な社会組織を維持していた。さらに述べると、西ゴート人は守勢に立たされていたと思われる。なぜなら、アストゥリアス人とカンタブリア人は独立を維持しただけでなく、以前の時代と同じようにドゥエロ川流域に侵入を繰り返していたからである。このような状況は711年にイスラム教徒がイベリア半島に侵入するまで続いていたと思われる。そして、イスラムの侵入もアストゥリアスとカンタブリアには何ら影響を与えることがなく、両者にとって8世紀は、断絶ではなく前時代からの継続を意味していた[10]。

この学説の重要性は、アストゥリアス王国の起源と特徴をはるかに超えたところにある。スペインの歴史において、他に類を見ない革命を意味している。なぜなら、この学説が正しい場合、今までの理解が間違いとなるだけでなく、逆のことが正しい理解となるからである。例えば、西ゴート王国の継承者がアストゥリアス王国ではなくアンダルス[11]であり、アストゥリアス王国の初期の領域は、少なくとも8世紀初頭には半異教徒の土地と見なされていたことになる。したがって、如何なる側面からもレコンキスタについて語ることはできなくなる。なぜなら、これは既に711年以前から生じていた現象であり、キリスト教信仰（あるいはローマ性）とは無関係で、むしろ北部部族（その社会はヒスパニアの他の地域つまり西洋の既存社会とは無関係である）の内部変化と深く関係した現象だからである。こうして見ると、いわゆるレコンキスタは、アストゥリアス人とカンタブリア人が半島南部の最も発展した人々に対して先史期から実践してきた攻撃、ローマ以前のメセタ地域の部族やローマ人や西ゴート人が既に経験していた攻撃の歴史のもう1つの章に他ならない。同様に、スペインの封建制は、ピレネー山脈以北のように、ローマ帝国の社会構造の変化にその起源を有するのではなく、《氏族的

---

10 （原注3）この学説は、かの有名な試論集 A. Barbero y M. Vigil, *Sobre los orígenes sociales de la Reconquista,* Ariel, Barcelona, 1974, 197 pp.（1965年に *Boletín de la Real Academia de la Historia* で同タイトルの論文として最初に公刊された）と *La formación del feudalismo en la Península Ibérica,* Barcelona, 1978, 437 pp. に依拠している。

11 イスラム支配下のスペイン。

社会》の発展にその起源を有していたのである。これは「在地経由の封建制」と表現されているが、スペインが特異な国であり続けてきたことを意味している。(なぜなら、血縁関係によって組織されたそれらの部族の存在により既に特異な存在となっていたからである[12]。)

しかしながら、《在地主義》は、脚光を浴びたにもかかわらず、その根拠となる個別研究を見ることはなく、その研究は常に仮説に留まった。その一方で、カンタブリア海沿岸地域のローマ化のパノラマ(これについては一般的な見解の合意が既になされていたが)までもが、ここ10年の考古学の目覚ましい発展により変化した。このことは、ローマ化の重要性が実証されたアストゥリアス地域については特に明白である[13]。例えば、9世紀のアストゥリアス芸術の謎もこれにより説明される。スペインを他とは別の存在としていた《氏族的社会》は、西ゴート期におけるその存続の仮説だけでなく、古代ローマ時代におけるその実在までもが大きな危機にさらされた[14]。帝国末期の半島北部の諸部族による不服従については文字資料の断片すら存在しない。4世紀のローマのような国家が諸部族の反抗と言う状況を前にして、国境城砦を建設して防衛的戦略を採用していたと考えることは真実性を欠いている。実際に、国境城砦に言及する史料は存在しない。逆に、考古学研究によって、ローマ時代後期のスペイン北部の生活がかなり平和であったことが明らかにされている。また、西ゴート時代にアストゥリアス人およびカンタブリア人による侵略があった事実を示す一片の証拠もない。存在するのは、バスク山岳地域の独立勢力であるバスク人が侵略を行ったことを示す証拠だけである。もっとも、ナバラ王国がレコンキスタにほとんど貢献しなかったという事実が示すように、バスク人はレコンキスタとは無関係であっ

---

12 (原注4) いわゆる封建制への移行は、現在のスペイン中世史研究のなかで最も論争を呼んだテーマである。近年の優れた研究動向については、J. A. García de Cortázar, «Estructuras sociales y relaciones de poder en León y Castilla en los siglos VIII al XII : la formación de una sociedad feudal», *Settimane di studio del Centro italiano di studi sull'alto medioevo,* XLVII, 2000, pp. 497-564 を参照されたい。

13 (原注5) V. C. Fernández Ochoa y A. Morillo Cerdán, *La tierra de los astures. Nuevas perspectivas sobre la implantación romana en la antigua Asturia,* Gijón, 1999, 126 pp.

14 (原注6) ビトリアで開催されたシンポジウムでの結論。M. C. González Rodríguez y J. Santos Yanguas (eds.), «Las estructuras sociales indígenas del Norte de la península Ibérica», *Revisiones de Hitoria Antigua,* I, anejos de la revista *Veleia,* Universidad de País Vasco, Vitoria, 1993, 240 pp.

た[15]。史料が語る内容は以下の通りである。すなわち、スエビ王国に包含されていたアストゥリアス地域は、西ゴート王レオビギルド（在位 568-586 年）が 585 年にスエビ王国を征服した際、西ゴート王国の支配下に組み込まれた。同王は、ローマ帝国の崩壊により図らずも独立状態にあったカンタブリア地域を既に 574 年に征服していた。西洋の国王たちが数多くの反乱を経験した時代において、アストゥリアス人による反乱が一度生じたようである（聖イシドルスが反乱と表現した出来事であるが、これに言及しているのは彼だけである）。もっとも、その鎮圧に国王シセブト（在位 612-621 年）の参陣を必要としなかったことから、この反乱はさほど大きな規模に至らなかったに違いない。カンタブリア人もシセブトの統治期に別の反乱を引き起こした可能性はあるが、他に反乱の痕跡はない。事実と異なる事柄が語られてきたのは、バスク人に関する情報がカンタブリア人やアストゥリアス人に適用されていたからである。しかし、これは大きな過ちを犯すだけでなく、全ての部族の歴史を理解不能にしてしまうものである[16]。

以上より、アストゥリアス地域とカンタブリア地域は、8 世紀初頭の時点でヒスパニアの一部を形成していたと結論づけることができる。ここで言うヒスパニアとは、ローマと西ゴートの過去を共有する国と定義することができるキリスト教徒の支配地のことであり、それ以上でもそれ以下でもない。この事実を踏まえて、アストゥリアス王国の起源と年代記（その内容に信憑性がないとは思えない）の解釈に関する問題に取り組まなければならないのである[17]。

---

15 （原注 7）Armando Besga Marroquín, *Domuit vascones. El País Vasco durante la época de los reinos germánicos. La era de la independencia* (*siglos V-VIII*), Bilbao, 2001, 605 pp. その要約として, «La independencia de los vascones», *Historia 16*, 314, 2002, pp. 8-25 を参照されたい。筆者は、西ゴート期のバスク人の状況とアストゥリアス人（およびカンタブリア人）の状況は非常に異なっており、正反対と言えるほどであったと確信している。

16 （原注 8）これについては, Armando Besga Marroquín, «La formación de la peculialidad vasca. Cántabros y vascos entre el siglo I a. C. y el IX d. C.», *Letras de Deusto*, vol. 24, núm. 65, 1994, pp. 147-172 を参照されたい。

17 （原注 9）近年の研究進展の結果, この問題に関する論争はほぼ収まった。この時期の当該地域の研究者として万人が認める碩学ガルシア・デ・コルタサルは,《在地人》に対する《ローマ人》の勝利は決定的であったと確言している。J. A. García de Cortázar, «Organización del espacio, organización del poder entre el Cantábrico y el Duero en los siglos VIII al XIII», *Del Cantábrico al Duero*, 64, Santander, 1999, p. 34. ガルシア・デ・コルタサルはこの見解を近年の別の研究において ↗

イスラム教徒の侵略とペラーヨ

アラブ人の史料もキリスト教徒の史料と同様、イスラム教徒によるアストゥリアス地域の支配を証言している。アストゥリアス人が抵抗した事実は明確ではなく、抵抗したと考えることも信憑性に欠ける。スペインのほぼ全域と同様、アストゥリアス地域は征服者の軍隊の前に降伏した。したがって、この地域におけるイスラム教徒の拠点は、ヒホン（カンタブリア北部において都市と言える唯一の存在）に設けられた小規模な駐屯地に限定された。このことはアストゥリアス諸年代記に明記されているが、これに言及しているのはアストゥリアス諸年代記だけである。一般に信憑性が高いと評価されている別のキリスト教徒の古い史料によると、アストゥリアス地域におけるイスラム教徒の支配は5年間続いたとされている。歴史家たちはこの期間を713年から718年の間としている。713年は、ムーサ[18]による遠征が行われ、諸都市が降伏協定を締結することによりイベリア半島の北西部全域がイスラム教徒の帝国に組み込まれたとされる年であり、718年はペラーヨによる反乱が確定的となった年である。

キリスト教徒の史料もイスラム教徒の史料も、アラブ人の侵略の後にアストゥリアス地域に西ゴート貴族の一部が到来したことを語っている。この情報を疑う理由はない。ただ、この現象の規模と貴族の重要度については疑う余地がある。イスラム教徒による征服－誰が何を言おうとも、かなり暴力的であった－の性格が（西ゴート王国の内戦も相まって）これらの移住者の到来を説明している。しかし、安全を求めてフランスに逃れた人々と同様、彼ら個人は亡命者であって反乱者ではなかった。なぜなら、彼らの目的は抵抗を続けることではなく、命を守ることであったからである。

ペラーヨがこの亡命者たちのなかに含まれていたとは思えない。ペラーヨの人物像については余り分かっていない。出自についてはなおさらである。これは今に伝わる情報に問題があるからである。キリスト教徒の史料もイスラム教徒の史料も、－非常に重要な情報であるのだが－、彼の出自が西ゴー

↘ も繰り返し述べている。

18 ムーサ・ブン・ヌサイル（640-716/717）。ウマイヤ朝アラブ人で北アフリカ総督。711年にベルベル人の指揮官ターリク・ブン・ジヤードをイベリア半島に派遣し、グアダレテ河畔の戦いで西ゴート軍を打ち破った。翌年に自らがアラブ人の大軍を率いてイベリア半島に上陸し、714年頃にはピレネー山脈まで侵攻した。

ト人であることを証言している。しかし、この情報には確証がない。実際に、ペラーヨがアストゥリアス人であったとする説だけでなく、バスク人、リエバナ人、ガリシア人、トレド人などとする説も存在している。しかしながら、議論に耐えうる唯一の仮説は、ペラーヨが西ゴート人であったとするものだけである。もっとも、このことは、ペラーヨが人種的にゴート人であったことを意味するものではなく、単純に（それで十分なのだが）、西ゴート王国においてゴート人として知られ、支配者層に多くの人物を輩出した少数者集団の一員であったことを意味していた[19]。ペラーヨという名称はローマ系であるが、彼の家族は全員がゲルマン人である。これが8世紀初頭のスペインーそして同世紀のアストゥリアスーにおいて、《西ゴート起源》が意味するところであった。これは、ヒスパニアの人名の大多数がラテン名を維持していたことによる。そのうえ、あらゆる情報が、ペラーヨが711年以前からアストゥリアスに定住していたことを示している。この背景がなければ、711年以降の彼の行動を理解することは困難である。さらに、ペラーヨあるいは彼の家族がアストゥリアスにおける西ゴートの統治機構の一部を担っていた可能性もある。アラブ人の征服によって消滅したのは西ゴート王制と中央統治機構であったこと、さらにイスラム教徒が地方統治機構を置き換える状況になかったことを考慮すると、アストゥリアス地域の西ゴート地方統治機構がグアダレテ河畔の戦いの後に消滅していたとする根拠はない。なぜなら、イスラム教徒は当初、被支配者の服従と租税の支払いを保証する上部統治機構を構築することにしか関心を示さなかったからである。

いずれにせよ、ペラーヨが当初はイスラム教徒に対して抵抗しなかったことは確かである。それどころかペラーヨは、名のあるイスパノゴート人と同様、新たな支配者に協力していた。『アルフォンソ3世年代記』ロダ版は、ペラーヨがヒホンのイスラム教徒の総督であったムヌーサ[20]の命により、ア

---

19 （原注10）1つの部族としてのゴート族が存在したことは疑わしい。存在したとしても、青銅器時代以降にスカンジナビアの地を離れ5世紀にようやくスペインに到達するという長く複雑な旅を始めた時点で、それは失われたと思われる。この長期にわたる過程で、西ゴート人は幾度となく民族変成を経験し、イベリア半島に入ったときには、とても不均質な民となっていた。もっとも、1つの民族を形成していなかったからと言って西ゴート人が存在しなかった訳ではない。自分たちがヒスパニアの征服者であると意識する固有の特徴を有する集団を形成したのである。

20 Otman Ben Abu Neza（?-722）．通称ムヌーザ。イベリア半島北部を管轄したア↗

ストゥリアス地域の租税の支払いに関連した任務のためにコルドバに派遣されたと明記している。マッカリー[21]は、ペラーヨがアミール国の首都コルドバで人質として扱われたと記している。もっとも、今は私たちにとって、両者の叙述の違い（両者が互いに無関係である証しであり、この無関係性がその信憑性を保証する）は重要ではない。なぜなら、両者の叙述は矛盾するものではなく、さらにクラウディオ・サンチェス・アルボルノスが考えたように、ペラーヨがアストゥリアスにおいて既に重要人物であったことを明らかにしているからである。ムヌーサがペラーヨの留守に乗じて彼の妹と結婚したという事実も同様のことを示している。もっとも、この事実のなかに、母系家族制（アストゥリアス地域では存在したことがない）が存続した形跡を見いだしてはならない。このエピソードを説明するためには、征服者たちの多妻制、アラブ人女性の不在、急速な従属により生じた脆弱な政治的絆を強固な親族関係によって強化する必要性の存在と言った状況を考慮するだけで十分である。疑わしいと思うのであれば、このような婚姻のなかで最も象徴的な事例である、征服者ムーサの息子アブドゥ・アル・アジーズとロドリゴ王の未亡人エギローナ王妃の結婚を思い起こせば十分である。

ペラーヨが妹とムヌーサの結婚に反対したことが、史料のなかで見いだせる、彼の反乱を説明するための唯一の理由である。『アルフォンソ3世年代記』のロダ版はこのことに言及しているが、このような叙述がもたらす影響を補正するために、その直後に、この状況はペラーヨがキリスト教教会の救済のために以前から考えていた計画を実行に移すために役立ったにすぎないと述べている。そして、よりイデオロギー的性格の強い同年代記のオビエド版は、ペラーヨのコルドバ滞在に関する記述と同様、ペラーヨの妹とムヌーサの結婚には全く言及していない。『アルベルダ年代記』もペラーヨの反乱に言及するものの、その原因については沈黙している。710年代に生じた色恋沙汰（ロドリゴ王とセウタ伯ドン・フリアンの娘との問題は、スペインの喪失をもたらし[22]、ムヌーサとペラーヨの妹の結婚は、スペインの再興の始

↘ ラブ人の総督。『アルフォンソ3世年代記』によると、ペラーヨの妹との結婚が原因でペラーヨと対立した。コバドンガの戦いに敗北しヒホンに逃れたが、アストゥリアス人によって殺害されたとされる。

21 Ahmed Mohamed al-Maqqari (c. 1578-1632). 17世紀マグレブの歴史家。*Nafh al-tib* の題名で知られる彼の著書『宰相リサーヌッディーン・ブヌル・ハティーブの物語』の導入部にアンダルスの歴史についての叙述がある。

22 伝説やロマンセを通して様々なバージョンが今に伝わっている。最も一般に知↗

まりとされている）がスペイン史において有する重要性は確かに疑わしい。しかしながら、ペラーヨの妹とムヌーサとの結婚に関する沈黙（ペラーヨの反乱理由に関する沈黙も同様）と『アルフォンソ3世年代記』ロダ版の編者によって行われた修正は、1つの情報の史実性を明らかにするものであり、情報操作の結果であるとは思えない。いずれにせよ、このエピソードが明らかにするのは、ペラーヨが行動を起こした背景には個人的な理由があったと言うことである[23]。ペラーヨの歴史的重要性は、他の多くのケースと同様に、彼が個人的な理由を集団的な企てに変える術を知っていたというところにある。

妹の結婚に反対したことによって、ペラーヨは追放の身となった。このことは、この結婚の有する政治的性格（と彼の家系の重要性）を示している。武装した大軍が自分を捕らえようとしているという知らせを聞いて、ペラーヨはアストゥリアス東部に逃亡し、そこで反乱を起こすことに成功した。この冒険的行為については、3つの側面を強調しなければならない。1つはペラーヨを取り巻く環境である。2つ目は、ペラーヨがアストゥリアス人の支配地の東端（ペラーヨにとって逃亡先であり出身地ではない）で反乱を起こしたという事実である。もう1つは、『アルフォンソ3世年代記』ロダ版の叙述から推察すると、ペラーヨは1人で逃亡を始めたのではなく、最初の支持者たちのなかに西ゴート貴族がいた可能性が非常に高いことである。

↘ られている話の概要は以下の通りである：「西ゴート王ロドリゴは、トレドの宮廷を訪れていたセウタ伯フリアンの娘フロリンダに一目惚れし、彼女に言い寄ったものの想いが退けられ、最後にはフロリンダを陵辱した。フリアンはこれに復讐するため、セウタにイスラム教徒を引き入れ、イスラム教徒とともにジブラルタル海峡を渡り、グアダレテ河畔の戦いでロドリゴ率いる西ゴート軍を打ち破り、フロリンダの恥を雪いだ。」

23 （原注11）しかしながら、このような偶発的なエピソードがなければ、レコンキスタと称される現象が生まれなかっただろうと言いたい訳ではない。というのも、別の反乱拠点の出現やその反乱の成功は、たとえペラーヨがいなくても、別の人物がレコンキスタを始めていたであろうことを示している。つまり、ペラーヨの歴史は、私たちが知っているレコンキスタの歴史が如何にして始まったのかについての歴史であって、レコンキスタの起源の歴史ではないのである。私が言いたいことは、ペラーヨがレコンキスタの歴史を始め、アストゥリアス王国の歴史を始めたが、それは無意識の産物であったということである。なぜなら、ただ存続するためだけに戦わなければならなかったときに、『アルフォンソ3世年代記』ロダ版が述べるような大計画（他のアストゥリアス諸年代記では暗に示されている）をペラーヨが描いていたと考えるのは信憑性に欠けるからである。

しかしながら、『アルフォンソ3世年代記』オビエド版の叙述にもかかわらず、同ロダ版が明確に記しているように、反乱の主人公はアストゥリアス人であった。これは当時のアストゥリアス地域の状況と反乱の進展状況からも予想できたことである。反乱がペラーヨによって始められ、指揮され、ペラーヨに合流する旧西ゴート貴族たちが次第に増加したという事実は、西ゴート人が2世紀半の支配の間に、スペインにおいて権力を独占することに成功していたことを示している。そして、この現象が、西ゴート王国が滅亡した後も旧西ゴート王国の辺境地域で存続していたのである。

『アルフォンソ3世年代記』ロダ版によると、ペラーヨはアストゥリアス人の集会 concilium に参加したことがあった。この集会は西ゴート時代の制度である市民公会議 conventus publicus vicinorum（当時の中央政府が関心を示さない政治的に重要でない案件の解決を担っていた）と関係があったかもしれない。その後、ペラーヨはコルドバに亡命し、そこから全てのアストゥリアス人に対して指示を伝えた。アストゥリアス人たちは結集し、ペラーヨを君主に選んだ[24]。アストゥリアス人の反乱は、この短い情報が提起する諸問題のなかで、説明するのに最も困難な問題ではない。アストゥリアス地域が軍事的占領から免れていたことを考慮すると、反乱は大胆な決断を必要としていなかった。服従を意味するにすぎない評判の悪い租税の支払いをやめるだけで十分だったのである。当初から認められたペラーヨの権力を正当化するための問題がさらに存在する。これを説明するには、すばらしい説得力に頼る前に、既に述べたことだが、ペラーヨが旧西ゴート王国の地方行政に関与しており、この行政機構が西ゴート王国の崩壊後も機能していたと考えるのは合理的だと思われる。最後に、前述の集会に参加したアストゥリアス人－ロダ版が述べるように、全てのアストゥリアス人が参加したことはあり得ない－がそのときペラーヨを自分たちの《王》[25]に選出したとする叙述は真実とは思えないと言っておかねばならない。家を建てるのに屋根から始めるようなもので順序が逆になっている。ペラーヨが国王になったのは、度重

24 （原注12）『アルフォンソ3世年代記』ロダ版、8. 同オビエド版によると、選挙はアストゥリアスに逃げ込んだ王家の血を引く西ゴート人の間で行われたとされる。『アルベルダ年代記』は、ペラーヨに関する言及はほとんどなく、選挙に関する言及は皆無である。

25 ペラーヨは、rex ではなく princeps の称号を用いた。アストゥリアス王のなかで最初に rex を用いたのはアルフォンソ1世である。その後、アストゥリアスの国王たちは、rex と princeps を区別することなく用いている。

なる勝利によるものであり、718年の集会において、従属から新たな君主制の創設への移行が決定されたからではない。

この歴史に関する次の有名なエピソードはコバドンガの戦いである。通常、この戦いは722年に起こったとされているが、その根拠は乏しい。アストゥリアス諸年代記の作者たちは、イスラム教徒の軍勢の数を18万7000人（そのうちコバドンガの戦いで12万4000人が戦死し、残りは敗走した）と記したことが示すように、信憑性が失われるほど誇張することでこの戦いを完全に神話化した。今はそれに代わって脱神話化が進んでいる[26]。もっとも、しばしば別の神話が生み出される結果となっている。例えば、コバドンガの戦いに関するイスラム教徒の叙述（キツネとブドウの寓話を彷彿させる内容で、イスラム教徒のアストゥリアス支配の終焉に言及していない）が紹介されたり、ペラーヨの勝利をイスラム教徒の収税人部隊に対する勝利であるとする説が現れたりした。しかし、アストゥリアスの独立が平和的な民族自決の過程でなかったように、コバドンガの戦いは、少なくともその影響力の大きさのゆえに重要であったと考えなければならない。『アルフォンソ3世年代記』は、コバドンガにおける敗北の後、イスラム教徒はヒホンを放棄せざるを得なかったと断言している。この情報を疑う理由は何もない。なぜなら、アラブ人によるアストゥリアスの支配が永久に失われたことは確かだからである。

---

26 （原注13）このことは、何冊かの書物のカバーの折り返し部分を読むだけでもある程度確認することができる。Roger Collins, *La conquista árabe, 710-797*, Barcelona, 1991, 214 pp. はその好例である。この研究は、新しく挑発的な見解として次のように紹介されている。《本書は実際に、事実と大きくかけ離れた見解に慣らされたスペイン人の読者に驚きをもたらし、必ず議論と抗議を引き起こす書物である。なぜなら、コリンズは厳格な史料批判を行った後、私たちが学んできた歴史の伝統的見解を徹底的に攻撃しているからである。ロドリゴ王の横暴や伯ドン・フリアン（架空で伝説上の人物とされた）の裏切り、コバドンガにおけるレコンキスタの始まりに関する英雄伝的な見解は、彼の再検討に耐えきれなかった。本書は、最も伝統的なアカデミズムの支持者たちに必ず反論されるだろうが、コリンズを批判する者たちも彼の広い学識を否定することはできないであろう》。コリンズ（上記の事項に関する論文を1編も公刊していない）の著書を称揚するためには、筆者は、スペインの歴史学研究の悲惨（でアカデミズム主義者の手による誇張的）なパノラマを素描することも厭わない。なぜなら、同じような誤りから抜け出すために、1991年のコリンズのような歴史家による新説発表を待たねばならなかったとすれば、私たちは今頃窮地に立たされていたであろうと思われるからである。

ペラーヨのその後の足跡は余り知られていないが、カンガス・デ・オニースに拠点を構えたことは確かである。ペラーヨは、イスラム教徒が退去した後に、アストゥリアス地域にその権力を拡大したことは明らかである。さらに、カンタブリア地域にも権力を及ぼした可能性がある（これはカンガス・デ・オニースを中心拠点に選んだことを説明するのに役立つと思われる)。そのことは、カンタブリア公ペドロ[27]の子アルフォンソ（恐らくカンタブリア地域の反乱の拠点を指揮していた）が、アストゥリアスを訪れてペラーヨの娘と結婚し、ペラーヨに協力したという事実によって裏付けられると思われる。もっとも、これは2つの抵抗拠点の同盟がもたらした結果かもしれない。この場合、アルフォンソがアストゥリアスに居住したことは、ペラーヨの優位が認識されていたことを意味していたと思われる。『アルフォンソ3世年代記』は、ペラーヨが多くの戦いで勝利を収めたとしか記していない。これが事実だとしても、それらの勝利はそれほど重要ではなかったであろう。なぜなら、イスラム教徒はこの時期にフランスへの侵略に労力を割いており、彼らにとってそれほど重要でない支配地の独立を阻止する状況にはなかったからである。

ペラーヨは737年にこの世を去った。蓄積した権力を長男のファビラ（在位737-739年）に継承することができた。これにより、新たな王制が世襲的に継承されていくことが明らかになった。しかし、ファビラの統治はたった2年で終わりを告げた。739年に熊に襲われて落命したのである。彼の治世の出来事については、サンタ・クルス教会堂の建立が唯一知られている。『アルフォンソ3世年代記』に記されたこの小さな情報は、重要な意味をもっている。なぜなら、この情報はアストゥリアス王国で最も古い文字史料である碑文によって確認されており、その碑文はアストゥリアス諸年代記の真実性を保証する証拠の1つだからである。さらに、その碑文とその教会堂が聖十字架に帰依していること自体が、新たな王制が明らかにイスパノゴート起源であることを反論の余地なく証明しているからである。

---

27 （原注14）しかしながら、私たちはこのときペドロが存命していたかどうかも、（一般に思われているように、）西ゴート王国のカンタブリア公 dux（地方総督）であったかどうかも分からない。しかし、公という単語の語義を考慮すると、ペドロがペラーヨと同様の立場、すなわちイスラム教徒に対して反乱を起こしたイスパノゴート人の指導者であった可能性は高い。

アルフォンソ1世の決定的な治世

ファビラ王の不慮の死によって、ペラーヨの娘エルメシンダの夫でファビラにとって義兄弟となるアルフォンソ（在位 739-757 年）が王位に即いた[28]。カンタブリア地域とアストゥリアス地域がまだ統合されていなかったにせよ、アルフォンソ1世の即位によって両地域の統合が成立したであろう。

アルフォンソ1世の治世はとりわけ重要である。『アルフォンソ3世年代記』は、最も重要な叙述として、アルフォンソ1世の業績を次のように記している：

> 国王ファビラが亡くなると、王国民全体によってアルフォンソが国王に選ばれた。アルフォンソは神の恩寵により王国の杖を受け取った。敵の攻撃は彼によってことごとく打ち負かされた。アルフォンソ王は、弟のフルエラとともにしばしば軍隊を押し進め、多くの都市を戦いによって奪い取った。例えば、ルゴ、トゥイ、オポルト、アネジア、首都大司教座都市ブラガ、ヴィゼウ、シャヴェス、レデスマ、サラマンカ、今はサモラと称されるヌマンシア、アビラ、アストルガ、レオン、シマンカス、サルダーニャ、アマヤ、セゴビア、オスマ、セプルベダ、アルガンサ、コルーニャ、マベ、オカ、ミランダ、レベンガ、アルボナリカ、アベイカ、セニセロ、アレサンコの諸都市とその城砦を奪い取り、アラブ人を剣で殺害し、キリスト教徒を故国に連れ帰った。
>
> このとき、アストゥリアス、プリモリアス、リエバナ、トランスミエラ、ソプエルタ、カランサ、今はカスティーリャと称されるラス・バルドゥリアスとガリシアの海岸部が植民された。というのも、パンプローナ（つまりデギオ）やベルエサと同様、アラバ、ビスカヤ、アイソネ、オルドゥーニャは、常に在地の人々の権力下にあることが知られていたからである。国王アルフォンソは立派な体格に恵まれ、神と全ての民に愛された。数多くの教会を建立した。18 年間王として君臨した後、天寿を全うした[29]。

28　本稿末の「アストゥリアス王国の国王家系図（718-910 年）」を参照されたい。

29　（原注 15）『アルフォンソ3世年代記』ロダ版、13-14.（これについては、オビエド版でも大きな相違は見られない。）叙述は次の第3段落へと続く：《私は実際に起こった奇跡について黙っていることはしない。アルフォンソ王が閉ざされた夜の沈黙のなかで自身の魂を解き放ち、宮廷人たちが王の亡骸の不寝番をしてい↗

この史料は、スペイン中世史研究のなかで最も論評（そして議論）されたテクストであることは確かである。それは、このテクストには非常に興味深い多くの問題点が含まれているからである。それらは、アルフォンソ1世の遠征の重要性およびその遠征とレコンキスタとの関係、遠征の人口的影響、半島北部への人口移動とドゥエロ川流域の無主地化をめぐる問題、アストゥリアス王国における移住者の定住（これはキリスト教スペインの中世におけるもう1つの重要な現象である再植民活動の最初の章を構成することになる）の問題、8世紀半ばのアストゥリアス王国の地理、バスク地域が含まれていたかどうか（これは中世前期のバスク史研究において最も議論されたテーマである[30]）に関する問題である。

アルフォンソ1世の治世は、特に従属アミール時代を終わらせることになった長期にわたる内戦（740-756年）と重なっていた。この時期には、中央山系の北側領域を守備していたベルベル人の大部分がアラブ人と対峙するためにその職務を放棄してアンダルシアに立ち去ったことにより、当初からドゥエロ川流域の非武装化が生じていた。こうしてアルフォンソ1世は、15年間にわたり誰に邪魔されることなくガリシア地域、エブロ川上流域とドゥエロ川流域に遠征隊を派遣した。したがって、一般に言われているように、『アルフォンソ3世年代記』のこの記述を疑う理由はない。さらに、イスラム教徒の史料は、より南の地域でのアルフォンソの征服活動について証言している。また、これらの軍事活動をカンタブリア人およびアストゥリアス人による侵略（少なくとも西暦紀元後にこれを示す記録はどこにもない）と関係づける理由もない。存在しない過去に目を向けるよりも、これらの遠征をよく知られている将来の出来事との関係で解釈し、レコンキスタのプロロー

↘ たとき、突然どこからともなく天使の歌声が聞こえてきた：〈ここに正義の人がこの世を去り、それを埋め合わせる者は誰もいない。正義の騎士たちも消えさり、それに気付く者も誰もいない。その正義の人は不安から解放され、彼の墓に平穏が訪れるであろう。〉これは真実であり、寓話だと思ってはならない。もし真実でなければ、偽りを語る前に口を閉ざすことを選んでいただろう》。これは年代記で記された2番目で最後の奇跡であり、アルフォンソ1世が重要人物とされた証しである。

30 （原注16）8世紀から10世紀の間の西バスク地域の状況については、Armando Besga Marroquín, «El Reino de Asturias y las Vascongadas», *La época de la monarquía astriana,* Universidad de Deusto, 2002 と *Astvres et vascones : las Vascongadas y el Reino de Asturias : el País Vasco entre los siglos VIII y X,* 2003 を参照されたい。

グとして見なさなければならない。ガリシア北部とエブロ川上流域の一画を除いて、これらの遠征が土地の占領に結びつかなかったことは確かである。それは、遠征の限界を理解していたアルフォンソが遠征の目的を、略奪と残留するイスラム教徒の殲滅および王国強化のための住民移動においていたからである。しかし、アルフォンソ1世（以下のような非凡な戦略を彼が考案したとされている）が目指したか否かにかかわらず、これらの軍事活動は後のレコンキスタを可能にした。なぜなら、第一に、イスラム世界との国境をおよそ400キロメートル南下させることで、人口を増加させたアストゥリアス王国の防衛体制を強化し、後の歴史が証明するように、アラブ人による攻撃の可能性を大きく減じたからである。またその後、イベリア半島において1008年まで続くイスラム教徒の覇権の時代に、アラブ人の攻撃（実際には防衛戦略をとっていた）にもかかわらず、アストゥリアス・レオン王国の明らかな優勢で決着するレコンキスタ（と植民活動）の進展を可能にしたからである。アストゥリアス・レオン王国は、10世紀半ばにアルフォンソ1世が遠征を行った空間まで領土を拡大するに至るが、アルフォンソ1世の遠征がなければ、これは想像すらできなかったであろう。

アルフォンソ1世の遠征は、ドゥエロ川流域の無主地化の問題と関連している。この無主地化の問題は、クラウディオ・サンチェス・アルボルノスによって巧妙かつ熱心に主張され、20世紀後半を通して、スペインの中世前期に関する歴史研究のなかで最も議論されたテーマである。ドゥエロ川流域の無主地化という現象は、アルフォンソ1世の遠征（戦争の結果と住民の北部への移住）だけに関係しているのではなく、そのずっと以前から始まっていたことを述べておかなければならない。そして、他の要因（激しい干魃やアラブの史料で証言された8世紀半ばの飢餓）の影響にもかかわらず、今日では、サンチェス・アルボルノスが主張したドゥエロ川流域の全面的な無主地化がなかったことが明白となっている。しかし、だからと言って対極に立って、人口の観点からほとんど何も起きなかったと考えてはならない。例えば、西洋キリスト教世界において都市がほとんど存続できなかったこの時代に、ドゥエロ川流域では都市に人が住み続けたと考えてはならない。基本的には、人が住み続けたのは国王統治の中心地や司教座の都市に限定されたのである。いずれにせよ[31]、私たちの関心にとって、アルフォンソ1世による

31 （原注17）8世紀半ばにドゥエロ川流域が経験した廃村化はあまりにも激しか ↗

北部への住民移住の情報に疑いの余地はなく、他にもそれを示す多くの証拠があると言うことが重要である。問題はこの現象の規模に関する評価に絞られる。これについて唯一言えることは、アストゥリアス諸年代記の叙述の簡素さを考慮すると、この事実が非常に重要であったので、8世紀のアストゥリアスの歴史のなかの出来事にとって共通の運命である忘却から免れることができたに違いないということである。このことは、アルフォンソ1世が、アストゥリアス王制がイスパノゴート起源であることを示す政策を行っていたと考えるのに十分である。ドゥエロ川流域の住民の半島北部への移住は、誕生しつつあった王国の軍事力を強化しただけでなく、少数者である西ゴート人あるいはイスパノゴート人（大多数の在地住民と対比するための表現であるが、既に述べたように、真の意味でのイスパノゴート人であった）の立場をも強化した。国王アルフォンソ1世の家系もイスパノゴート人であった。

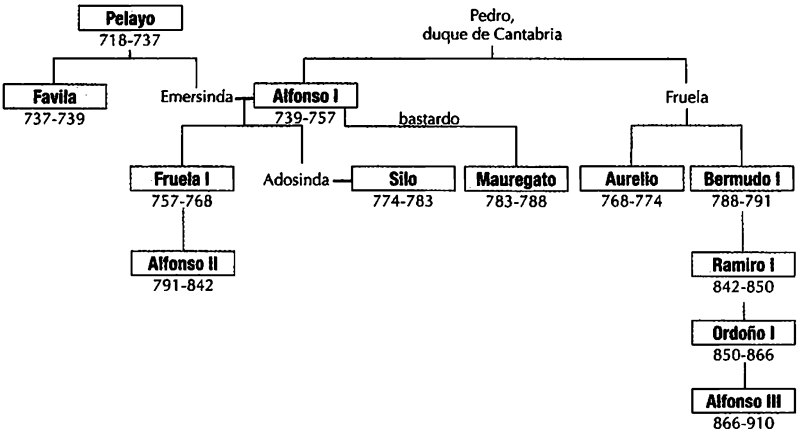
『アルフォンソ3世年代記』が証言するように、アルフォンソ1世がレコンキスタの歴史のなかで最初の再植民を行ったことを疑う理由はない。『アルフォンソ3世年代記』の作者は、populare という動詞を、かつてラモン・メネンデス・ピダルが主張して大きな支持を得た《組織する》と言う意味ではなく、《植民する》の意味で使用したことは明らかである。なぜなら、この単語が使われる文章は、アルフォンソ1世による北部への住民移動の叙述に続いて記されており、当然ながら、これらの人々をいずれかの場所に定住させなければならなかったからである。実際に、カンタブリア海の沿岸地域に新たな住人が到来したことを示す十分な証拠や手掛かりが残っている。この再植民の重要性は、既に言及した王国の軍事的強化と王国を支配していた少数者たちの政治・社会的強化に限定されなかった。文化的影響もあった。そのなかには、定住と領域支配の新たな形態の出現（あるいは強化）も含まれていた。

↘ ったので、イスラム教徒は、軍事的優位を回復したときでさえこの地域の再支配を試みず、キリスト教徒による再植民の妨害をこの地域に関する政策の主目的とした（したがって、ドゥエロ川流域の戦略的《無主地化》は、豊かなイスラムスペインを結果的に守ることになった）と私は考えている。この意味において、8世紀のアラブ人は、この領域の服従と税の徴収を保証する政治的上部構造を確立することで満足していたということ、そして、ドゥエロ川流域においてこの政治的上部構造を復元できなかったのは、それを支えるための最小限の人口基盤を欠いていたからだということを忘れてはならない。

最後に、『アルフォンソ3世年代記』の叙述が、アストゥリアス王国の最初の領域図、それも非常に広大な領域図を提供していることに言及しておく。およそ3万平方キロメートルに及ぶ広い版図は、間違いなく局地権力機構や権力者との間で結んだ協定や合意の賜であり、1つの王国にとって十分過ぎるほどの強固な基盤であった（年代記が一致して王と記しているアルフォンソ1世が、王の称号を有さなかったとする仮説があるが、私はその仮説はあり得ないと考えている）。この版図の詳細については議論の余地がある。しかし、版図の西部については、年代記で pars maritima Galaecie と記されたガリシアの海岸部とは、ガリシア北部でルゴまでの空間を指すに違いない。このルゴの町は住人を失っていたが、アルフォンソ1世の統治期に再植民されたのであった。東部については、アストゥリアス王国はビスカヤとアラバの一部（現在のアラバより小さな空間で境界線を確定することは不可能である）にまで広がっていたが、ギプスコアは版図に含まれなかった。ギプスコアは先史期に逆戻りしており、デバ川以東の地域はアストゥリアス・レオン王国の一部を構成することは一度もなかった。当時の原初カスティーリャ－その誕生はアストゥリアス王制に包含されたことに起因する－は、現在のブルゴス県の最北端の山間部に限定されていた。

さらに、アルフォンソ1世の治世が重要であることに疑いの余地はないと述べておかなければならない。その重要性のゆえに、アルフォンソ1世がアストゥリアス王国の真の創設者であると見なされるほどである。この見解は、たとえペラーヨとファビラが王の称号を有していた（彼らは少なくとも君主であったのだが）場合であっても、あるいは反対に、アルフォンソ1世自身が王という称号を名乗らなかったと仮定しても有効であろう。彼の即位以前は、私たちがアストゥリアス王国と呼んでいたものは、存続だけを目的とした軍事政権にすぎなかった。カトリック王アルフォンソの偉業により、アストゥリアス王国は後の数十年間にわたる試練を乗り越えるだけの堅固さを獲得することができた。そして、少なくとも、後の王国の発展のためのアウトラインがこの時期に示されたと言える。

（次号に続く）



アストゥリアス王国の国王家系図（**718-910** 年）